

横尾俊信先生を悼む

徳田 陽明

京都大学化学研究所

連絡先 tokuda@noncry.kuicr.kyoto-u.ac.jp

横尾俊信先生は、かねてよりご療養中のところ去る 2 月 25 日に逝去された。64 歳であった。横尾先生は、東北大学で学位を取得された後、米国レンセラー工科大学博士研究員、三重大学工学部助手、助教授を経て、1988 年 4 月京都大学化学研究所助教授として着任され、1994 年 7 月同教授に就任された。その後、20 年の長きにわたって、研究指導、後進の育成に務めてこられた。ニューセラミックス懇話会とも関わりが深く、本紙の初代編集委員長を務められたと伺っている。

私は今から 19 年前の春に京都大学化学研究所横尾研究室に学部生として配属して頂き、横尾先生のご指導を仰ぐこととなった。今でも当時のことを良く覚えているが、特に印象的だったのは、「やってみろ！」という激励である。研究には失敗がつきものであるが、まずとにかく手を動かしてみる、ということである。やっているうちに不思議と別の道筋が見つかったりするもので、そうこうするうちに自然とチャレンジ精神を学ぶことができた。また、横尾先生と一緒に仕事をされた（あるいは酒を酌み交わされた）方は納得して下さると思うが、様々なことに強い信念を持っておられた。しかし、そうではあっても対立する意見を頭ごなしに否定するのではなく、話を良く聞く、自主性を重んじる、という姿勢を大事におられた。そのお陰もあって、様々な熱い議論ができたことは、今となっては懐かしく楽しい思い出である。私自身、学位の指導をして頂き、その後ラボのスタッフとして研究のお手伝いをさせて頂けたことは、感謝してもしきれないし、また御恩返しをする前に逝ってしまわれたのは本当に残念である。

横尾先生のお仕事のスタイルは、本当に完璧主義的で何事にも徹底するというものだった。若い頃から夜遅くまで（朝早くまで）研究室にて仕事をされていた。先生は、「私は夜型で、昼は苦手なんだよ」と冗談めかして仰っていたが、端から見ていると、そうでないことは良くわかっていた。仕事を仕上げる最後の最後まで全力を尽くされていたのである。お亡くなりになる最期の 3 ヶ月間は自宅療養の傍ら、ラボの研究会に出席して下さった。ラボのメンバーに「私は何もすることなく長く生きるよりも、今やるべきことを一生懸命やり抜いて、太く短く生きる方がいいと思っている」と仰っていたのが忘れられない。そのお言葉の通り、卒業研究の指導を厳しく行われ、完了された。私を含めてラボのメンバー一同、最期まで全身全霊をかけて与えられた仕事をやり抜くのだという姿勢には学ぶところが多く、身をもって教育して下さったのだと感じている。

私にとって横尾先生は、たとえるならば親父のような存在であった。時に厳しく、時に暖かく指導して下さった。今でも、どこからか「おい徳田！ やってるか！」と叱咤激励されるような錯覚を覚える。お亡くなりになってしまっただけで本当に残念で寂しい気持ちではあるが、これからも私達の心の中には、横尾イズムが生き続けていくにちがいない。

